

外からの目で上方文化の本質に迫る

「大阪・和の暮らしを体験する会」成果報告より

2017年2月、3日間にわたって、大阪で外国人を対象にした「大阪・和の暮らしを体験する会」が開催された。それを受けて2日後には「『上方の生活文化』を考えるシンポジウム」を実施。本レポートでは、二つのイベントの紹介を通して、現在のインバウンド対応だけでなく、今後の東京オリンピック・パラリンピックの後をも見据え、日本や各地域がこれから世界に向けて何を発信していくべきかを考える。

鶴見佳子
Tsunemi Yoshiko

つるみ・よしこ

文筆家。新聞社勤務を経て1989年フリーランスに。住まいと暮らしを中心に多様な媒体で取材・執筆、企画立案・編集を手がける。講演やファンリテーターも得意。2012年からアマチュア落語家「大川亭知どり」として落語の上演と創作を開始。お遍路と巡礼を実践的研究中。名古屋出身、大阪在住。

200年前のまち体験 ——大阪を見る・聴く・味わう・感じる

大阪くらしの今昔館訪問

和の暮らしを体験する会を催した大阪くらしの今昔館（以下、今昔館）は2001年に開館し、1830年代・天保年間の大坂のまちを再現している。建具や展示物を手に取ったり、路地に入り込んだり、暮らしの目線で楽しめるのが魅力的だ。年間利用者は2014年度の36万人から16年度57万人へ急増し、半数以上を外国人が占める。浴衣の着付けサービス（30分・500円）は、1日300人の枠が毎日完売する

ほど人気だ。自由に撮影ができ、自撮りしてSNSに発信すると、それを見てさらに来館が増える。

落語家の故・桂米朝の案内アナウンスを聞いてから木戸門をくぐると、江戸時代のまちに吸い込まれる。風呂屋や本屋、唐物屋、町会所、薬屋などがつくられ、町家の内部には座敷や竈、走り（流し）、水壺、井戸が効率的に配置されている。

一方、裏長屋には大工や青物売り、義太夫節の師匠が住んでいるという設定で、それぞれの暮らしが演出されている。当時の賃貸住宅のシステム「裸貸し」も見てとれる。江戸時代の大阪では、長屋の家主はスケルトン（構造躯体）を所有し、畳も竈もインフィル（内装・設備）はすべ

て店子の持ち込みだった。現代でいうSI住宅の仕組みが大坂にはあったのだ。

井戸端という共用空間はコミュニティの核であり、トイレやゴミの回収の仕組みは現代をしのぐエコシステム。町角や家の中に犬や猫、ねずみの置物が仕掛けられ、来場者に人気の撮影ポイントとなっている。

能楽や歌舞伎など本格的な古典芸能をいきなり鑑賞するのは難しいが、住まいと暮らしがテーマなら敷居が低い。学術的に裏付けられた専門博物館だからこそ見ごたえがある。多角的に楽しめ、何度行っても飽きない。「インバウンド」という外的要因と、SNSの発達が昨今の入場者増を支えています。これをいかに深化

れた人と交流を楽しむ。お仕着せでなく、200年前を再現した空間で着ることが体に響いたのだ。演劇『大坂町家劇場』に対しても高評価をつけた。「役者たちはとても上手で、多いに楽しんだ」（インドネシア・30歳）

「笑いの中から商人のまち、大坂のありかたが見える」（中国・32歳）館内には他の見学者もいて混雑していたが、演劇に引き込まれていた。多言語に対応したタブレットも配布されていたが、あまり活用せず直に楽しんだ。体験会の外国人たちはなぜ楽しめるのか。言葉は時に観光や交流の壁となることもあるが、それを超えて楽しめたのは、まさに彼らが「外からの目」をもち、初めて見た「本格的な上方文化」に興味津々であり、あらゆる角度から楽しめる工夫を主催者や関係者が丁寧に企画し、ともに実践しているからなのだ。

200年前の大坂を再現した今昔館は、その壮大さと緻密さに魅力がある。体験会の参加者が感動したのは、単にハードの立派さだけではない。「日本の町家は、昔の日本人の知恵を表している。昔の生活の中には不便さもあると思うが、日本らしさが感じられた」（ベトナム・24歳）

「商家の大戸、板戸、無双窓など、建具がとても興味深い」（ドイツ・25

歳） ぼったり床几や箱階段、ひもを使って開閉する台所の高窓など、狭い町家を有効に使うための建具や工作技術、暮らしの工夫に感心した人が多かった。「大坂のまちは狭いと感じた」と感想をもらした人もいた。大坂の狭さは、大坂の地域文化が成り立つ原点でもある。多くの人口が狭い土地に集まったからこそ、コンパクトな住まいや暮らしが工夫され、活気を生み、人と人の距離感を近づけた。そんな大坂という地域文化の本質を感じ取った外国人がいたということだろう。

近世・近代の音楽を聴く

「上方の生活文化」を考えるシンポジウム会場に、日本テレマン協会の演奏が響いた。ジョスカン・デ・プレの名曲『千々の悲しみ』は、日本に帰国した天正遣欧使節が天正19（1591）年に演奏し、豊臣秀吉が3度もアンコールを求めた曲だという。宣教師を介し、最初に西洋音楽を聞いたのは織田信長だったと言われ、その次が秀吉。西洋から届いた初期バロックに感動したであろう秀吉に想いを馳せる。

同協会の創設者、延原武春氏は「西洋の音楽はキリスト教とともに日本に伝わり、最初はカトリックの、次いでオランダから出島を介してプ

イベントダイジェスト

大阪・和の暮らしを体験する会

実施日 2017年2月4日(土)～6日(月)の3日間
12:15～18:00

会場 第1部 大阪くらしの今昔館(大阪市立住まいのミュージアム)

第2部 吉田家住宅(登録有形文化財)

外国人を対象に開催された「大阪・和の暮らしを体験する会」は、内閣官房オリンピック・パラリンピック推進本部事務局が委託し、平成28年度オリンピック・パラリンピック基本方針推進調査の一環として、大阪くらしの今昔館が主催、大阪ガス(株)エネルギー・文化研究所(CEL)が協力したプロジェクト。体験会には3日間で17か国・58人の外国人が参加した。

第1部は、参加者全員が和装で今昔館の中を歩き、200年前の大坂のまちと暮らしを体感。プロの俳優たちと今昔館のボランティア「町家衆」による演劇『大坂町家劇場』(演出・構成・台本 上田一軒)を楽しむ。

第2部は、現存する築96年の吉田家住宅で、家主の吉田齋氏の挨拶と、谷直樹今昔館館長による解説を受けた後、書道、茶の湯、上方舞を楽しむ。建築や住まいの「しつらい」、暮らし方とともに、もてなしの心、礼儀作法やルールに触れる。

「上方の生活文化」を考えるシンポジウム

実施日 2017年2月8日(水) 13:30～17:15

会場 大阪市立住まい情報センター 3階ホール

「大阪・和の暮らしを体験する会」を受けて開催され、180人が参加した。大阪市住まい公社の蟹恒三理事長の開会挨拶、オランダ王国のローデリック・ウォルス総領事の来賓挨拶に続いて、3日間にわたる「大阪・和の暮らしを体験する会」の映像を鑑賞。上方舞・書道・茶の湯・大坂料理・音楽演奏がホールで披露された。

谷直樹今昔館館長が「大阪・和の暮らしから、なにを学ぶのか」と問題提起。それを受けて参加者による討論会「和の住まい文化を考える」を実施。異文化コミュニケーションにおける問題点や総合交流のあり方など、活発に意見を交換した。





プロの俳優が薬屋の旦那さんやご寮さん、丁稚などに扮して外国人参加者を案内する。江戸時代の大坂弁ながら軽妙な演技で参加者の緊張をほぐす。



日本テレマン協会が、400年以上前に大坂に流れた楽曲をリユートで奏でる。秀吉と同じ曲を聴いているという感動が会場に広がる。



江戸時代からの系譜をふまえ、現代的視点を融合して、梶山一希氏が再現した「本膳料理」は今昔館が保有しているお膳や食器に盛られた。



身長と洋服のサイズに応じて着付師が和装一式を用意して参加者に着付け、美容師が髪を結う。イスラム圏からの参加者はヒジャブを被って和装姿に。



今昔館を支えるボランティアの「町家衆」が、大工や青物売り、長屋のおかみさんに扮している。参加者は言葉の壁を超え、等身大の大坂を楽しんでいる。

ロケスタントの楽曲が伝わった」と話す。この日、演奏されたJ・S・バッハの『G線上のアリア』も出島の人々が手持ちの楽器で弾いただろうと延原氏は話す。

キリスト教の禁止と鎖国で、西洋音楽はいったん姿を隠すが、江戸末期、ペリーやロシアからの使節団の来日で再び扉が開く。明治期には雅楽の奏者が和楽器をバイオリンやオーボエに持ち替え、鹿鳴館時代の音楽を支えた。

バイオリニスト兼作曲家のフリッツ・クライスラーは大正時代に来日し、中之島の中央公会堂で演奏して

いる。名曲『愛の喜び』も大阪に影響に違いない。大正時代からの時間がぐっと縮まり、楽曲が違った表情に見える。

同協会代表の中野順哉氏は、「外国人との交流に際し、ある程度、言語を超える体験が音楽にはできる。音楽には過去から分断されたものと、現代まで共有されているものがある。過去から分断されていないものは日常生活の中にある。もっと音楽文化の体験と交流の機会を」と話す。

大坂の食を味わう

江戸時代、長崎に入ってきた医薬

「基礎となる食材の合わせ方や考え方は江戸時代も今も同じ。その思想は、現代の上方料理に脈々と伝わっている。調理技術や道具はどんどん進歩したが、よりおいしいものを食べたい・作りたいという想いが現代の『懐石』につながった」と梶山氏は話す。

100年前の暮らし体験

大阪に暮らす・生活文化を実践する

吉田家住宅で体験する100年前の住空間

今昔館での体験会の後に参加者た

ちが訪れた吉田家住宅は、1921年に建てられ、家主の住む主屋と、路地をはさんで15戸の長屋（賃貸住宅）から成っている。普段は非公開で、今も普通の暮らしが営まれている。周りはビルやマンションばかりだが、戦争や震災の被害を免れた吉田家住宅だけが、およそ100年前の住空間を維持している。主屋は2008年に国の登録有形文化財に登録され、数年前に耐震改築が行われた。

子が訪れた吉田家住宅は、1921年に建てられ、家主の住む主屋と、路地をはさんで15戸の長屋（賃貸住宅）から成っている。普段は非公開で、今も普通の暮らしが営まれている。周りはビルやマンションばかりだが、戦争や震災の被害を免れた吉田家住宅だけが、およそ100年前の住空間を維持している。主屋は2008年に国の登録有形文化財に登録され、数年前に耐震改築が行われた。

品は、大坂の道修町で検査され、国内に流通した。長崎奉行所の役人が大坂に立ち寄った時にふるまわれたのが「本膳料理」。上質な料理屋には全国から豊富な食材が集まっていた。文化10（1813）年、道修町3丁目の会所で、長崎奉行関係者に供された献立が、大阪府立中之島図書館蔵の資料「御附用御献立 明石屋季助」に残っている。これを読み解き、谷直樹今昔館館長や学芸員から、当時の時代背景や人々の暮らし方を学び、現代的視点で本膳料理を再現したのが大阪市北区の日本料理店「かこみ」店主、梶山一希氏だ。

品は、大坂の道修町で検査され、国内に流通した。長崎奉行所の役人が大坂に立ち寄った時にふるまわれたのが「本膳料理」。上質な料理屋には全国から豊富な食材が集まっていた。文化10（1813）年、道修町3丁目の会所で、長崎奉行関係者に供された献立が、大阪府立中之島図書館蔵の資料「御附用御献立 明石屋季助」に残っている。これを読み解き、谷直樹今昔館館長や学芸員から、当時の時代背景や人々の暮らし方を学び、現代的視点で本膳料理を再現したのが大阪市北区の日本料理店「かこみ」店主、梶山一希氏だ。

本膳料理は、形態から食材、調理技法、盛りつけまで一定の型にはまっている。あわびを皿に盛り合わせる時には、同じ磯の香りの青のりを合わせて三杯酢をかける。高級食材の伊勢海老はハレの日の献上品に使う。鯛の塩釜焼きは塩で蒸して旨味を凝縮し、笹の香りをつけ、鱈のわら焼きは串に刺して、わらの炎でいぶしてよい香りをつける。それぞれ味覚と嗅覚の融合を楽しむ。いくつものお膳に盛りつけて同時に提供し、客は3時間ほどかけて食べる。1品ずつ客のペースに合わせて提供する現代の接待料理「懐石」とは違う。



襖を開け、屏風と燭台を置いたら座敷が舞台になることに驚く参加者。能楽の武家文化の影響を受け、町人が上方文化の粋として育てた上方舞を鑑賞。



体験会を終え、参加者たちは熱心に感想を寄せてくれた。外からの目が、普段、日本人が意識していない日常の暮らしの価値に気づかせてくれる。



吉田家住宅の美しい「しつらい」。座敷は最も格式の高い部屋で、季節や催事に合わせて床の間や違い棚に掛け軸や生け花などが飾られる。



吉田家住宅は路地をコンクリートにせず土のまま残している。「その方が子どもを育てるにはいいでしょ」と話す、家主、吉田齊さんの優しいまなざし。



「茶の湯は、日本人のまじめな性格を体現している」「茶道は、人を落ち着かせる」などの感想が寄せられた茶の湯のワークショップ。



手本を見たり、講師に手を添えてもらって体験した書道のワークショップ。「昔の記憶がよみがえって静かに過ごせた」と話すのは中国からの参加者。

住文化や生活文化を「活用」している。釘を使わない工夫や、収納としての箱階段、通風や採光を阻害せずにプライバシーを守る格子などを見ながら、日本建築の仕組みと日本人の暮らしの知恵は外国人に確実に伝わっていく。

大阪に伝わる生活文化

茶道から書道、上方舞まで

「縁側と座敷の活用にはぬくもりがある。木造住宅なので防寒性は低い」(中国・23歳)

「部屋を大きくしたり、小さくできるのがいい。私の家にはそんな楽しみがない」(中国・23歳)

住まいの細部や暮らし方の工夫に気づき、自分の暮らしと比較する。

今もここで生活が営まれていることに新鮮な魅力を感じていた。

「驚くべき味わいがあり、興味深い芸術でもある」(フランス・23歳)

「亭主から歓迎されていると感じた。そんな文化を日本人が守っていることが好きだ」(ジャマイカ・32歳)

一方、書道を指導したのは玄風書道会の書道家、角谷天楼氏。参加者は「寿・和・花・夢・茶」などの文字を書き、筆の使い方や紙の押さえ方など手をとって教えてもらう。「上手ですよ」と褒められ、書をしたためた半紙を土産としてうれしそうに持ち帰った。

「おもしろい実技。何年も練習しなければきれいな漢字は書けそうにな

「アメリカ・51歳」という感想もある一方で、「母国にも書道があるが、書いたことがないので、とてもいい経験。筆の握り方の違いにも気づいた」(中国・23歳)というように、もともと筆や紙を使う歴史や文化のある中国人でも、日本の書道への魅力を発見したことがおもしろい。

吉田家住宅では、襖を取り外し、屏風と燭台を置くと部屋が舞の舞台に変わった。江戸時代に上方で生まれた上方舞は、上方の町人文化の粋として愛され、洗練されてきた舞踊だ。座敷に屏風をたてて格調高く舞うことから、「座敷舞」とも呼ばれ

「足も崩してもいいですよ」と言われても参加者は正座し、神妙に挨拶の仕方やお茶の作法を習う。

茶の湯体験は初めてという人も多かったが、参加者たちは単に「抹茶と和菓子がとてもおいしい」と喜ぶだけでなく、茶道の精神や芸術性、上方のおもてなし文化に深い意義を見いだしている。

「おもしろい実技。何年も練習しなければきれいな漢字は書けそうにな

「おもしろい実技。何年も練習しなければきれいな漢字は書けそうにな

「おもしろい実技。何年も練習しなければきれいな漢字は書けそうにな

「おもしろい実技。何年も練習しなければきれいな漢字は書けそうにな

「おもしろい実技。何年も練習しなければきれいな漢字は書けそうにな

「おもしろい実技。何年も練習しなければきれいな漢字は書けそうにな

「おもしろい実技。何年も練習しなければきれいな漢字は書けそうにな

「おもしろい実技。何年も練習しなければきれいな漢字は書けそうにな

「おもしろい実技。何年も練習しなければきれいな漢字は書けそうにな

「おもしろい実技。何年も練習しなければきれいな漢字は書けそうにな

「おもしろい実技。何年も練習しなければきれいな漢字は書けそうにな

「おもしろい実技。何年も練習しなければきれいな漢字は書けそうにな

「おもしろい実技。何年も練習しなければきれいな漢字は書けそうにな

る。上方舞のワークショップでは、山村流の舞手、山村若女氏、山村若瑞氏、山村若愛之氏が『江戸土産』『黒髪』『鐘ヶ岬』を舞った。「多様な表情があり、深い意味のある舞だと感じた」(マレーシア・26歳)など、参加者たちは舞の美しさに感動していた。

上方文化考

上方の生活文化・おもてなしとは何か

17世紀以降の京・大坂地方を「上方」と呼ぶ。特に、水陸の交通が便利だった大坂には全国から物資が集り、経済・金融の中心地「天下の

交通・物流・人の交流からなるネットワークが形成され、お互いが影響しあった。上方へ行けば何か新しいモノ・コトがある、新しい価値に変換できる。それを求めてすべてが上方へ集まる。そのトランスミッシ

同時に、上方では豊かな町人文化が育まれた。井原西鶴や近松門左衛門などエンタテイメントの担い手だ

「おもしろい実技。何年も練習しなければきれいな漢字は書けそうにな

「おもしろい実技。何年も練習しなければきれいな漢字は書けそうにな

「おもしろい実技。何年も練習しなければきれいな漢字は書けそうにな

「おもしろい実技。何年も練習しなければきれいな漢字は書けそうにな

「おもしろい実技。何年も練習しなければきれいな漢字は書けそうにな

「おもしろい実技。何年も練習しなければきれいな漢字は書けそうにな

「おもしろい実技。何年も練習しなければきれいな漢字は書けそうにな

「おもしろい実技。何年も練習しなければきれいな漢字は書けそうにな

「おもしろい実技。何年も練習しなければきれいな漢字は書けそうにな

「おもしろい実技。何年も練習しなければきれいな漢字は書けそうにな



今昔館や吉田家住宅での体験会の様子が上映された後、茶の湯・書道・上方舞・料理・音楽などの上方文化がステージでも披露された。



さまざまな国籍や職業の180人が参加した『『上方の生活文化』を考えるシンポジウム』。上方文化に対する現代人の知識や発信力についても考えさせられた。



シンポジウムでは、外国人参加者からのコメントも多く寄せられた。写真は関西在住のアメリカ人の女性。

かつて上方を貫いたおもてなしの精神は、現在の大阪ではどうなのか。谷直樹今昔館館長は「大阪人の一人ひとりにはフレンドリーで、流暢な外国語を話せなくてもわかりやすい日本語で伝えたり、体で表現したり、会話を楽しみながら売り買いできる。そこが東京とは違う点で、大阪人のパフォーマンス力は最大の強み」と話す。上方の地域文化を伝える博物館のあり方については「集客施設として来場者を『飲み込む』だけではなく、こちらから『まちへ出ていく』ことも大切。今回は今昔館と吉田家住宅のように点と点がつながっ

ただけ。さらに地域に広げ、線と面にしなくては」と分析した。シンポジウムの成果

「和の暮らしを体験する会」を受けて、2日後に『『上方の生活文化』を考えるシンポジウム』が開かれた。在阪の総領事から国内外の公的機関に勤務する人、働いたり学んだりしている外国人、体験会の参加者、歴史学や観光学の研究者、会社員までいろいろな国籍や職業の老若男女180人が参加した。冒頭で谷直樹今昔館館長は次のように話した。

「水運によって大坂は繁栄し、現在の大阪市章が水路を示す濠標^{（おぼりかぎ）}であることにもつながる。19世紀に大坂観光にきた人は鴻池や住友、加島屋などの豪商の家を見物した。商売の駆け引きを行う上で、上方のおもてなし文化が育まれた。季節毎の住まいのしつらいや茶の湯などにも、おもてなし文化が見てとれる。これから、上方の文化と諸外国との文化を比較しながら、相互に理解・融合できる基盤づくりを進めるとともに、私たちも改めて上方の文化に目を向け、大阪のおもてなし文化を今一度、創造していきたい」

「上方文化をどう感じ、何を学んだのか」という問いに真っ先に手を挙げたのはベトナムからの留学生だった。「着物を着て、200年前の大阪の町に入り込み、本当に日本らしさを感じた。演劇では昔ながらの生活と住宅の説明がわかりやすかった。男女共用の風呂屋、長屋に住む人たちの様子、人々のおおらかな暮らしぶりや近所付き合いを身近に感じた。昔の建物では鍵を使わない、箱階段で空間を有効に使う、通風・採光の役割を果たしながらブライバシーを守る格子などに、建物の工夫と日本

人の知恵を見た。書と上方舞は初体験で楽しかった。私は少数民族の出身で、母国では経済発展に伴い都市化が進み、少数民族の住まいや文化が失われつつある。生活文化を受け継ぐことは何か、どう守るべきかを改めて考えさせられた」

大阪で働く人からもいろいろ提起された。フランス人からは「日本語がわからないため、理解できないこともあった。伝えるという点では是非改善してほしい」。プロダクション経営の日本人は「今昔館では町家衆がまちの空気をつくっている。表面的なことだけでなく本物を伝えることが大切。言語を超えたところで伝えるにはまだまだ足りない点が多い」

グローバルな時代に、言葉という点で国際化への対応策は必要だが、言葉に頼らずに魅力や感動をどう伝えるかという発想も、これからの交流や観光を考える上では大切だろう。

大阪人がインバウンドの担い手となるには

人を吸い寄せる世界の魅力的な都市と競い合った上で、大阪が生き残れるかどうかには、長期的な戦略がいる。

体験会の参加者がこれから希望する文化プログラムの1位に「日本建

築、和風住宅」を挙げた。体験会を通じて外国人は「つくり込まれた住空間のしつらい」「スマートな住文化」「人の礼儀作法や規律」に魅力を見いだし、それが大阪の地域文化だと認識している。これらに対して日本人から「私自身、大阪の生活文化について説明・紹介できないことがわかった」（日本・39歳）など自省の発言も少なくなかった。

地域文化を知る上ではさまざまな体験をし、人が交流し、理解しあうプロセスが必要だ。「異文化への接触には、見学・体験・交流という流れがある。『観光』とは見学すること。『観風』とはその土地の風にあること、つまり土地の人と交流することを意味する。観光と観風を意図し、今後の交流に生かすべきだ」と歴史学者の高島幸次氏は提言した。

インターネットで何でも簡単に情報を検索・収集できる時代だからこそ、現場に行くことでしかわからない地域文化に触れ、体験し、国境や時代を超えて「共感」を呼べるか否かが今後のインバウンドの肝ではないか。それへの備えや戦略を考える上で急務なのは、実は大阪人自身がかつてと同じようにトランスミッションの担い手となることではないのか。インバウンドの受け手が、大阪（上方）という地域文化の本質を理解し、魅力をきちんと発信してこ

そ、この先も外国人観光客にリピートしてもらえる。

果たして今の大阪人は、自分がインバウンドの担い手、交流の支え手だと意識できているだろうか。魅力的な地域でなければ、外国人がそのうち消えてしまう危機感をもっているだろうか。

目先のインバウンドへの対応も大切だが、東京オリンピック・パラリンピックを経て、その後に続く時代の都市のあり方や観光戦略を考える上で、地域は自らの根底にある「地域文化」に改めて着目する必要性に迫られている。

「そのためには、地域の歴史を学ぶ必要がある。過去の住まいや暮らしの中には、現代人にはすでに異文化となった事例もあるからだ。ただ、誰にでも原体験はあるのだから、その上で学んだり、古くからの知恵を掘り起こしたりする機会を積極的につくりたい。グローバルの時代だからこそ自国や地域の歴史の理解が必要だ」と谷直樹今昔館館長は言う。

自らの歴史をひもとき、自分の属する地域の本質を知り、自分たちのアイデンティティがどこにあるか、ともすれば見失いがちな生活文化を見直してみる。多彩な専門家や研究機関とともに「将来、どんな大阪でありたいか」「どんな人に来てもらいたいのか」「そのために何をしたら

いいか」「地域文化をどう再生するのか」と意見交換をする。博物館や美術館などが集まる拠点と協働を図り、交流のネットワークを広げて参画するのも大切だ。

「外からの目」にヒントをもらい、「外からの声」に耳を傾ける。彼らが魅力と考える価値をしっかりと認識する。表面的なことや利他的なことではなく、どうもてなしたら本当に楽しんでもらえるのか、ひいてはこのまちに興味を持ち続けてもらえるのかを考える。交流を支えるのは人であり、まちの魅力は人から伝わることをもっと意識したい。誰だっ「親切的な人がいるまち」や「魅力的な地域文化を実践しているまちや人」は忘れないものだ。インバウンドに対してどんな一歩を踏み出すのか、試されているのは自分自身なのだ。大阪人は覚悟を決めるしかない。

協力・データ提供

大阪らししの今昔館（大阪市立住まいのミュージアム）
大阪ガス（働エネルギー・文化研究所）

参考文献

「上方文化・ルネッセ研究会調査報告」@tamiyamaとめ